

万葉集

vol. 17

日本に現存する最古の和歌集「万葉集」をわかりやすくご紹介します。

朝妻の霞

「朝妻」と聞いて、みなさんは何を連想しますか？ 人の名字や琵琶湖畔の地名、あるいは歌舞伎舞踊の「朝妻船」を思い浮かべる方もいらっしゃるでしょうか。しかし奈良県で生まれ育った方の多くは、金剛山の東麓、御所市朝妻の地を思い浮かべるのではないかと思います。

この歌に詠まれた「朝妻」とは、まさにその御所市朝妻のことです。興味深いのは、その地名を連想させ導き出すことばとして、「子らが名に懸（かけ）の宜（よろ）しき」と表現されていることです。

ここでいう「子」とは子どものことではなく、いとし女性のことです。直前の短歌（二八七番歌）にも「朝

子らが名に
懸けの宜しき
朝妻の
片山岸に
霞たなびく

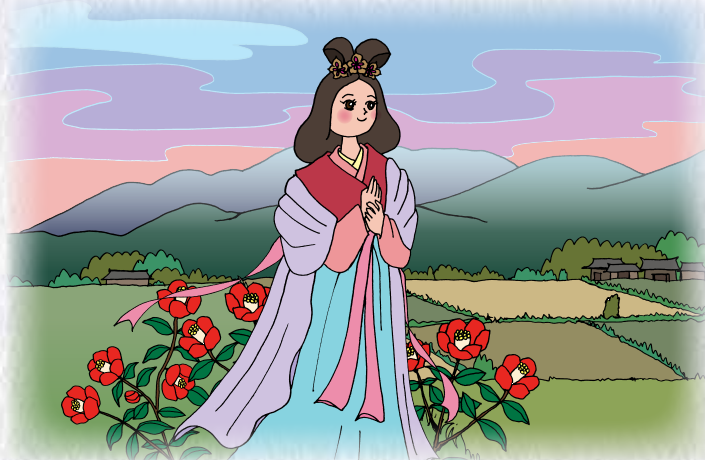
（訳）いとしあ娘の名にかけて呼ぶのにふさわしい朝妻、その山の斜面に霞がたなびいている。

柿本朝臣人麻呂歌集（巻10一八八番歌）

妻山」が詠まれていて、「朝妻」という地名が、いとし「妻」の「朝」の様子を思い起こさせていたことがわかります。共に夜を過ごした男性側から見ても、翌朝の妻の様子というのは、いつも以上に親密でいとしものなのかもしれません。

この「朝妻」の地は、天武九年（西暦六八〇年）九月九日に天武天皇が行幸した地でもあります（『日本書紀』巻第二十九）、近くには、平安時代の書物である『延喜式』の神社一覧にも掲載された高鴨神社があります。また、同じく平安時代の『新撰姓氏録』という書物には、有力な氏族である秦氏の先祖が「朝津間」に住んでいた、とも書かれています。

由緒ある地名をいかした恋歌のような表現が特徴的ですが、春の山にたなびく「霞」を詠む歌であ



アクセス

近鉄御所駅から奈良交通バス風の森下車（約13kmのコース）



くほんじ 九品寺周辺の彼岸花（写真提供：御所市観光協会）※その年の条件等で咲き具合が変わります。

葛城古道ウォーキングマップは

歩く・なら 葛城古道

検索

葛城古道

日本神話のふるさと・御所市を南北に走る葛城古道。金剛山・葛城山のふもとに「高天彦神社」や「葛城一言主神社」など記紀に登場する地名や神々を祀る古社が点在しています。神代の時代に思いを馳せながら、のどかな田園風景の中を歩いてみませんか。

万葉ちゃんのスポット紹介

